

バクーニンの政治綱領

——人類解放国際秘密結社綱領について——

左 近 毅

一九世紀ロシアの革命運動に於てのみならず、一般に西欧社会主義運動の総体の中で顯著かつ多面的な役割を演じたミハイル・バクーニンは、これ迄不幸な歴史事情に禍いされて、その思想と行動の軌跡を全的に開示する機会を失してきた。もちろん、従来とてもバクーニンの著作公刊の試みは皆無であった訳ではない。しかし乍ら、その卓越した革命的行動力と活動範囲の広さから推して、バクーニンの未公刊著作は演説、書簡類をも含めて、予想以上の大量にのぼると想像される。それを裏付けるかのように、マルクス研究の規模と機動性には遠く及ばず乍らも、近年バクーニン自身の筆稿が幾つか発見されている。また今年にはバクーニン没後一〇〇周年に当り、諸外国に於ける関連資料の発掘、整理、刊行の作業が進捗するのではないかと期待される。それはさて置き、最近発見されたバクーニンの筆稿の中にあつて、彼の思想的展開を説明するうえで極めて重要

と判断されるのは、スウェーデン王立図書館に眠るものである。スウェーデンの急進主義者アウグスト・スルマンに宛てたバクーニンの書簡がそれで、仏文で草された内容は、「人類解放国際秘密結社」という当時のバクーニンが抱懐した政治行動の規矩と思想の核心を包括的に縷述した、一種の政治綱領を構成している。従来、バクーニンの秘密結社綱領なるものは、一八六六年の「国際革命結社設立案」が最初であると目されてきた。一八六四年九月ないし一〇月初旬に書かれたと推定されるこの書簡は、かかる断定に変更を迫るのみならず、国際労働運動史の解釈にも新しい論点を導入する契機になっている。

そこで本稿では、「人類解放国際秘密結社」の基本内容を摘出し、当時のバクーニンが従事せる革命活動の中でそれが占めた位置を明らかにし、さらに他のバクーニンの諸綱領との対比によって、革命組織と戦術に関する特徴を浮き彫りにしたい。

二

この「綱領」は、次の言葉で始まっている。「当結社の目的は、万国の革命勢力を結集して自由のための神聖同盟をつくり、宗教、政治、官僚制、金融といったありとあらゆるヨーロッパ専制勢力の神聖同盟に対抗するにある。」バクーニン自身が参加を企図したポーランド蜂起の失敗によって、またワルシャワの中央委員会やロンドンのゲルツェンとの戦術や評価をめぐる対立は、彼に革命の戦術と組織に関して転進を余儀なくさせた。蜂起成功の可能性の少ないことを認めていたにしろ、ポーラン

ド側のバクーニンに対する予想外の冷たさは、彼に「ポーランド人とうまくやっていくのは難しい……最良のポーランド人といえど、ロシア人のわれわれには敵なのだ」と言わせ、スラヴの連合体に未来をつなぎ乍らも、「今はスラヴ諸民族のことを考えるのは、ばかばかしい……」との結論へ導くに至った。

イタリヤでバクーニンは、ガリバルディの紹介でフリー・メーソンの組織に接近した。無神論を標榜する彼のかかる行動は奇異に映るかもしれないが、これは勿論教理に対する彼の関心を例証するものではなく、ブオナロッティに対しかつて示した関心と同じく、革命組織のあり方をめぐる問題関心に発した行動と見るべきである。特異な影響力を有する既存組織の換骨奪胎に失敗したバクーニンは、自らの革命構想を自力で具体化すべくイタリヤ人を中心に革命結社を設立した。無定形かつ定かならぬ政治方針を、国際組織化の企図の下に明文化せんとする試みの表われがこのスルマンへの書簡である。表面では反目しつつも、革命の動きを前にしては直ちに結束する各国政府の反動性を指摘し、自由の実現を期する人民の側も大同団結する必要を説いたのち、如何にして各国人民の結集を達成するかに説き及ぶ。バクーニンは文盲の人民大衆を直ちに自覚的に結集せしむるのは困難との前提に立ち、ヨーロッパ社会を六カテゴリーに分類して、「新同盟」に参画しえるのは有識階級内の少数自由主義派グループの更に誠実なる層（第六の三）として、会員徴募の目標を限定する。バクーニンがスルマンやクヴァンテンに呼びかけた理由は、此処に明らかである。

しかも、各国の斯かる少数先進グループを糾合する方法は秘密を前提とする。公開の国際会議に依る手段は、反動政府の先制攻撃を許す結果になる他、監視に依る優秀な人物の出席不能や無限定層の任意参加のばあいは内部分裂の危険も生ずるとして、その効果を否定し、非公開の原則を強く主張する。その際、分裂と内紛の原因に「ドイツ人あたりが特に掻き回す……」と指摘しているのは興味深い。組織の存在を初めとし、その一切の活動を極秘とする事の必要は綱領の中で再三繰返され、機密保持の条件として構成員の等質性が要求される。後半では「新同盟」の原則を揭示し、真理認識の基礎として神の代りに人間理性を据え、神権の現世に於ける体現者としての全ての国家の排斥を唱える。そして自由を唯一の価値基準と見做すことによつて、その自由が支える万人の連帯の保証を集団労働の中に求めるのである。

以上の原則から導出される重要な帰結が次の五点であり、未来社会への指標とすべくバクーニンが挙列した見取り図の数少ない例である。

- 一、公正を実現する上に絶対不可欠な相続権の廃止。
- 二、全ての人間関係の基盤たる自由は、結婚の自由従つて離婚の自由を結果する。
- 三、性的区別を除く男女の等権。労働としての育児の公認。
- 四、児童を両親と公機関の二重の庇護の下に置き、自由なる学校教育を授与する。
- 五、労働を富の唯一の産出者と見做す。

肉体と頭脳を合一せる労働の担体となる最小単位は協同組織 (association) であり、その集合体が形成する政治単位が共同体 (commune) である。これらを更に包摂するのは州、民族体 (nation) として国際連合 (federation internationale) で、それぞれに行政と立法の府が自由をモメントとして対応する。以上の綱領の基本条件を実現するためには、単一国民の決起では不十分で、少なくとも数カ国人民の同時多発的総決起が必要との観点から、バクレーニンは秘密組織の国際化を訴える。この個所で彼は、革命勝利の現実化が「少なくとも五〇年、ひょっとして一〇〇年かかるかもしれない」と慎重に述べている点に注目したい。

スウェーデン急進派への訴えかけは、バクレーニンの真意がロシア革命の回廊として、またポーランドに代る陽動作戦の適地としての同国認識に在ったことを暗示している。しかしその意図が奈辺にあったにしろ、反応は芳しからざる形で終始した。バクレーニスが加入を認めたスウェーデン人はスルマンの他に二人で、その活動は殆どゼロに等しく、要求された活動の定期報告も履行されず、恐らく日を経ずして自然消滅したものと思われる。相継ぐ小組織の結成と放置は、以後バクレーニンの革命活動の側面を性格づけるものとして重要となる。

三

此の綱領によって見るに、バクレーニンの結社構想が一八六四年のフイレンツェに於て、曲りなりに現実化した点は断定で

きよう。つまり、バクレーニンの秘密結社は「人類解放国際秘密結社」あるいは「社会革命同盟」、翌年の「国際同胞団」、更に一八六八年の「国際社会民主同盟」(所謂「アリアンス」)へと、部分的消滅と継続を含みつつ展開していったわけである。一八六四年の最初の結社には、まもなくフランス人やポーランド人もスルマンらとは別に加わっているが、ドイツ人は参加の形跡がない。汎スラヴ連合とヨーロッパ革命の構想を、バクレーニンは一八四八・四九年以来変らぬ課題として抱き続けてきた。しかるに「新綱領」には、従来窺えなかった面が登場してきている。それはスラヴ・ナシヨナリズムの相対的後退化とアナキズムへの傾斜である。例えばポーランド蜂起前の一八六二年に草されたアピールに於て基調となっていたロシア優先主義は影を潜め、共同体信仰に根差す固有の「農村社会主義」は引継がれるものの、都市プロレタリアートにも一定の役割を認め、さらに自由のキー・ノートが全面的に鳴り響く。「新綱領」に於けるアナキズムの展開は、後年のそれのように未だ確たる段階に至ってはいないものの、色調の濃さは掩うべくも無く現われている。

翌年完成をみた「革命のカテキズム」は明らかにこの「新綱領」を踏み台としており、新たな個条としては組織論が加えられ、革命的リゴリズムが前面に強く押し出される。両者を比較して浮かび上ってくる点は、権威と国家の反動に対する対処の仕方であり、前者に漂っていた寛容と樂觀主義は全面的に姿を消し、対決と戦闘主義がひときわ色濃くなっている。また権威

と中央集権主義の包摂する概念領域が、幾分広がり示している点も見逃せない。但し、後年の「国際社会民主同盟綱領」に於て鮮明となった政治の否定は、これらの孰れにも未だ現われていないのである。

四

「新綱領」に接して最後に附言しておかねばならないのは、既に触れた新たな論点の評価である。ルドゥニツカヤとチャコフは、「新綱領」の執筆とバクーニンの秘密結社誕生がマルクスとの会見に先行していた事実を重視し、バクーニンはマルクスを欺いて分派活動を国際労働者協会創立のそもそもより開始、「秘密のアリアンスに拠って協会の主導権を入手しようとした」と結論している。

マルクスとバクーニンのロンドンに於ける会見の様子は、余り分明にされていない。両当事者のどちらの証言に典拠を求めるとかで多少の評価は異なるが、「よく話し合った」⁽³⁶⁾にしては会谈内容が後世に伝わっていない。だが確かなのは、両者が互いにそれ程の悪感情を募らせる事もなく別れている点である。バクーニンの「背信行為」の原因は、何処に在ったのであろうか？ 事実をマルクスからのみ隠したのでと解釈するより、ドイツ人一般から秘密結社の存在を隠したと考えたい。かつて体験させられた逮捕とロシア引渡しの経緯は、バクーニンにドイツ不信を徹底的に植付けたのである。このゲルマノフォビアは、マルクスとの対立を介し後年益々増幅されてゆく。協会のため

の活動の約束⁽³⁷⁾を、バクーニンは気軽に交したものの、それをマルクス程深刻に考えなかったのは氣質の差異とも言えよう。転じて、この結社自体「秘密インターナショナル」などと称する体のものでなかった点はバクーニン自身が知悉していた筈で、マルクスに敢えて告げなかったのも隠したとするよりは、寧ろ言い淀んだのではなからうか。まして、この秘密結社を後年の、とりわけスペインとイタリアでバクーニンの思惑とは無関係に実体化していった「国際社会民主同盟」と同一視したり、国際労働者協会の主導権奪取の狙いで設けられたとする解釈は、行き過ぎである。この点に就いては、紙幅の都合上稿を改めて十分に論証したい。

(1) マルクスと鋭く対立したバクーニンは、国際労働運動に於ける正統派の地位を失った結果、ソ連を筆頭とする各国で十分な思想的究明の光を与えられずに閑却な扱いを受けてきた。就中、所謂スターリン時代以降のソ連では、同国が高い研究員能力を有するにもかかわらず、まとまった形態でのバクーニン資料の公刊は途絶している。

(2) これまでに刊行されたバクーニンの著作に就いては、Max Nettlau, *Bibliographie de l'anarchie*, Paris, 1897
や G. P. Maximoff (ed.), *The Political Philosophy of Bakunin*, London, 1953 に掲載された Rudolf Rucker の序文から知ることが可能である。なお、ビルーモヴァ著 佐野努訳『バクーニン伝』下巻所収の左近の解説も参照。

- (3) 例えば、アムステルダム国際社会史研究所による「*ハタチン・アルヒーフ*」全一五巻刊行の計画に、それがうかがわれる。ネットラウ文庫を擁する同研究所の壮大な企図は、完結の暁にはおそらく「*ハタチン*」像を大幅に変えることにならう。
- (4) 例えば、「*コンフューノ*」が「*ハタチン*」で発見した「*ハタチン*」自身を彼に宛てた書簡類 (cf. C. M. R. S., vol. VII, p. 4, 1966 et vol. VIII, n^o 1, 3 et 4, 1967)、『*ハタチン*』の『*ハタチン*』紙に載った「*ハタチン*」の論議 (cf. A. B. Дулов, Незвестные статьи М. А. Бакунина в газете «Амур» в «Связка и каторга в Сибири», Новосибирск, 1975) など。
- (5) スウェーデン王立図書館、アウグスト・スルマン政治往復書簡、スルマン文庫の内。
- (6) 本書簡には日付がながいが、「*ハタチン*」と「*ハタチン*」はこれを一八六四年九月六日—一〇月一二日の間に書かれたと云う (cf. «Новая и новейшая история», 1971, № 6, стр. 114)。
- (7) Михаил Бакунин 1876—1926, сборник, М., 1926, стр. 69.
- (8) ルドヴィツカヤとチャコフは、「*ハタチン*」が既にこの時期に秘密結社構想を抱いていたにも拘わらず、それを「*ハタチン*」に意図的に隠したと主張する。cf. «Революционная ситуация в России в 1859—1861 гг.», М., 1974, стр. 300.
- (9) テキストは「*スウェーデン王立図書館作製のマイクロフィルム*」に拠った。なお併せて、次のロシア語訳をも参照した。М. А. Бакунин, Международное тайное общество освобождения человечества, в «Революционная ситуация в России в 1859—1861 гг.», М., 1974, стр. 313—335.
- (10) 紙幅の関係で、「*ハタチン*」の「*ハタチン*」遠征計画並に「*ハタチン*」・「*ハタチン*」身派遣」に就いては、「*ハタチン*」を参照。E. H. Кар著、酒井只男訳『浪漫的亡命者たち』筑摩書房、一九五三年、二六〇—二七五頁。
- (11) ゲルツェンとの対立に就いては、外川藤男氏が次に於て詳述してゐる。『*ストラツ研究*』第十七号、北海道大学、一九七三年、一〇〇—一一二頁。
- (12) А. И. Герцен, Собрание сочинений, том XI, М., 1957, стр. 377.
- (13) Письма М. А. Бакунина к А. И. Герцену и Н. П. Огареву, с биографическим введением и объяснительными примечаниями М. П. Драгоманова, С.-Петербурга, 1906, стр. 234.
- (14) Там же, стр. 234. またこの帰結は、一八七〇年の論文『*ロシア軍將校*』の中で、全面的に展開されてゐる。Archives Bakounine, TOM V, Leiden, 1971, p. 1—35.
- (15) 「*ハタチン*」は随所で国家と並び宗教を批判し、

- 例えは次を参照。菊地昌実訳『連合主義・社会主義・反神学主義』(外川・左近編『バクーニン著作集』第5巻所収、白水社、一九七四年)。
- (16) スチュクローフは「これを驚くべきこととしてゐる。см. Ю. Стеглов, М. А. Бакунин, его жизнь и деятельность, том II, М.-Л., 1927, стр. 291—292.
- (17) バクーニンは早くからバクノロフに親交してゐた。see A. Lehning, Bakunin's Conceptions of Revolutionary Organizations and their Role, in 《Essays in Honour of E. H. Carr》, London, 1974, p. 60.
- (18) *ibid.*, p. 62.
- (19) Richard Hostetter, The Italian Socialist Movement, I: Origins (1860—1882), New York, 1958, p. 77.
- (20) ルドヴィンツカヤとチャコフは「この少数グループによる秘密結社構想を、解放手段への無理解に発したものと見て批判してゐる。см. 《Революционная ситуация в России в 1859—1861 гг.》, М., 1974, стр. 304.
- (21) 《Вопросы истории》, 1967, № 12, стр. 39.
- (22) アドルフ・ンデマンと偽名マルクスなる人物。
- (23) 《Революционная ситуация в России……》, М., 1970, стр. 279.
- (24) バクーニンは一八六六年七月一九日付の書簡で「過去三年間を社会主義革命のための国際秘密結社づくりに専念して過した」と述べてゐる。см., Письма М. А. Бакунина……, стр. 277—278.
- (25) この結社は当初は「社会民主同盟」とも呼称され、またバクーニンは一八七二年にこれを「社会主義革命同盟団」と称するなど、極めて不統一だが、バクーニン自身同一組織を恣意的に様々な呼び方をしていた点に注意しなければならぬ。なおバクーニンは『キー記念論文集』では正しい指摘をし乍らも (*ibid.*, p. 62) 'Archives Bakounine, V, Leiden, 1974 の注 (p. 522) ではこの結社を一八六六年の「同胞団」と混同する誤りを犯してゐる。
- (26) Archives Bakounine, V, p. 166.
- (27) フォンテンヌでバクーニンはルドミラ・アミンツナとドイツ女流詩人を知ったが、結社への加盟は勧めなかつたらしい。
- (28) 『ロシヤ、ポーランド並びに全スラヴの同胞へ』。см., 《Колокол》, выпуск V, No. 122 & 123, Лондон, 1862, факс. изд., М., 1962, стр. 1021—1028.
- (29) ルドヴィンツカヤとチャコフはその論文『バクーニンの「秘密インターナショナル」の発生』に於て、後年のバクーニン主義の一切がここに判然と窺われると指摘するが、極論ではある。см., указ. 《Новая и новейшая история》, стр. 123, 124.
- (30) 『革命のカテキズム』に就いては、次を参照。前掲『バクーニン著作集』第5巻、一五一—二三六頁。
- (31) 革命陣営に於ける専制主義の糾弾は、一八七〇年の

- 『一フランス人への手紙』などで大きくバクレーニンの取上
 かる所となる。cf. Michel Bakounine, Oeuvres, Tome
 I, Paris, 1907, pp. 107—108.
- (32) 二人は既に掲げた注(6)^(8)^(21)^(23)の全て
 の論文の中で、新しい論点の重要性を再三強調している。
- (33) バクレーニンの最初の結社を、二人は一貫して「秘密イ
 ンターナショナル」と呼ぶ。
- (34) Richard Hostetter op. cit., p. 78.
- (35) バクレーニン側は、一八六五年二月七日付マルクスへの
 手紙と、『マルクスとの個人的関係』(孰れも前掲『バクレー
 ニン著作集』第6巻所収)「マルクス側は『非公開通知』
 (MEW, Band 16, Berlin, 1962, S. 409—420. 邦訳大月
 版『マルクス・エンゲルス全集』16, 四〇三—四一五頁)
 と、一八六四年一月四日付エンゲルスへの手紙 (MEW,
- Band 31, Berlin, 1965, S. 9—16. 前掲邦訳版31, 八一—
 三頁)が証言である。
- (36) 前掲『バクレーニン著作集』第6巻, 三九九頁。
- (37) MEW, Band 16, S. 409 (前掲邦訳版, 四〇三頁)。
- (38) ルドゥニツカヤとチャコフ自身、同結社の実体が無に
 等しかった点を認めている。см., «Революционная ситу-
 ация……», 1970, стр. 279—280. レーニンとも「バクレー
 ニンの結社が事実上有名無実であったと指摘する。see,
 Arthur Lehning, op. cit., p. 74, 76.
- (39) バクレーニンは「メンバーが七〇名に達した段階で結社
 の創立会議を開く計画を有していたが、その計画はおそら
 くメンバーが増えぬため断念された。см., «Революцион-
 ная ситуация……», 1970, стр. 279.

(大阪市立大学助教授)